

Romeo and Juliet における遅延: Juliet の責任

村上 世津子*

(平成 27 年 10 月 30 日受理)

Delay in *Romeo and Juliet*: Juliet's responsibility for the Tragic Ending

Setsuko MURAKAMI*

Though *Romeo and Juliet* is generally regarded as a tragedy of destiny rather than characters, many critics discuss the relationships between the lovers' characters and their tragic deaths. For example, Dickey attributes Romeo's "headlong fury and blind despair" to the tragic ending. R. S. White and others think that Romeo's killing of Tybalt triggers the tragic action. Unlike the view of Romeo, however, few critics discuss the relationships between Juliet's character and the tragic ending. Because it is Juliet who proposes marriage, drinks magic potion which causes apparent death, and dies by stabbing herself instead of drinking poison, she has often been regarded as more courageous and active than Romeo. But is she really courageous and active? This paper discusses the Juliet's responsibility for the tragic ending.

Key words: Romeo, Juliet, Paris, marriage, Friar Lawrence

1. はじめに

Romeo and Juliet の伝統的解釈は Romeo と Juliet が基本的には運命の悲劇であり彼らを悲劇的運命に駆り立てる最大の要因が Verona の二名門、Montague 家と Capulet 家の怨恨にあるというものである。Prologue で Chorus は Romeo と Juliet が "fatal loins of . . . two foes"(5)¹ から生を受けた "a pair of star-cross'd lovers"(6)であり彼らの恋が "death-mark'd"(9)であることを告げる。劇の冒頭では Montague と Capulet の召使たちのけんかが提示される。Juliet が "a Capulet"(1.5.116)であることを知った時に Romeo は "My life is my foe's debt"(1.5.117)と言うし、Romeo が Montague であることを知った時に Juliet は "Prodigious birth of love it is to me/ That I must love a loathed enemy"(1.5.139-40)と言う。さらに塀を乗り越えて Juliet に会いに来た Romeo を見た時に彼女は "the place death, considering who thou art,/ If any of my kinsmen find thee here"(2.2.64-65)と言う。彼女の言葉が大げさでないことは Capulet のパーティに Romeo が忍び込んだことを不快に思った Tybalt が後日 Romeo に決闘を挑むことで示唆される。

* 英文学 (建築学科) 准教授

そして劇の終わりの大公の言葉は Romeo と Juliet の死が両家の怨恨によって引き起こされたことを強調する：“See what a scourge is laid upon your hate”(5.3.291).

とは言え伝統的解釈の他に Romeo と Juliet は悲劇の主人公と言うよりも犠牲者であるとする考え方(Franson 69-70 他)から Romeo と Juliet の悲劇的結末の原因を主人公の行動に求めるものまで多様な解釈が存在する。後者については、R. S. White 他の批評家が Romeo による Tybalt 殺しを指摘し(White 12-13)、Dickey らは Romeo の “headlong fury and blind despair”(Dickey 269)に原因を求めている。Peterson に代表される批評家は、恋人たちが passion に駆られた道を邁進することに原因を求めている(Peterson 307)。また Alfar は Juliet の権威に対する謀反に原因を求めている(Alfar 126)。ただし総じて言えば主人公に責任を求める解釈においても Juliet に対する見方は Romeo に対する見方ほど厳しくない。Juliet は Romeo より分別も、勇気も、行動力も備えた女性と解釈される傾向にある。だが Juliet の行動と悲劇的結末の結びつきは passion に駆られた道を邁進することや権威に対する謀反だけだろうか。本稿では Juliet の行動と悲劇的結末の結びつきについて考察するが、その前に Romeo の行動と悲劇的結末の結びつきについて触れたい。

2. Romeo の行動と悲劇的結末

Snyder は *Romeo and Juliet* は “becomes, rather than is, tragic”(Snyder 73)であり、その転換点は Mercutio の死にあると指摘する。Snyder によれば Montague と Caplet の間の不和は根深いものというよりも機械的な行動様式であり劇の冒頭での Montague と Capulet の決闘は妻たちに抑えられる程度のものにすぎない。召使たちも戦争や王国の命運を気遣うよりも結婚の手筈を整えたり台所仕事をしたりする喜劇にふさわしい人物である。しかし軽妙洒脱な喜劇的精神を体現する Mercutio が死ぬとこの劇の喜劇的精神も殺されると主張する。なるほど Mercutio の死はそれまで言及されるだけであった死を実際に劇の中に持ち込む。しかも Mercutio は舞台上で観客の眼前で殺されるから Mercutio の死が衝撃的であることは否めない。

しかし Mercutio の死は Romeo が意図したものではない。Mercutio は Tybalt との喧嘩を止めに入った Romeo の脇の下から刺されて死ぬのである。それに対して Tybalt の死は Mercutio の仇を討ち彼自身の名誉を証明するために Romeo の方から決闘を申し込んで意図的にもたらしたものである。捕まったら大公に死刑を宣告されるから逃げるように Benvolio に促されたときに Romeo は “O, I am fortune’s fool”(3.1.138)と言う。Romeo の Tybalt 殺しは衝動的なものである。もし Mercutio が Tybalt に殺されなければ Romeo が Tybalt を殺すことはありえなかったから情状酌量の余地は大いに存在する。実際、大公自身 Romeo に対する罰を死刑から追放に軽減する。しかしだからと言って Romeo を “fortune’s fool” と言うのは Romeo の責任を看過することである。追放を宣告されたことを

知った時に Romeo は “Heaven is here/ Where Juliet lives, and every cat and dog/ And little mouse, every unworthy thing,/ Live here in heaven and may look at her,/ But Romeo may not.”(3.3.29-33)と云う。だが Tybalt 殺しは Tybalt に切りかかられた Romeo が正当防衛のために反撃した時に殺してしまったものではない。友人の Mercutio が Romeo のために Tybalt に殺されても Romeo が名誉失墜— “vile submission”(3.1.72)—のそしりを甘受して Tybalt に決闘を申し込む代わりに大公に Tybalt の非道を訴えることもできたであろうからだ。

2幕2場の balcony の場面で Juliet が “Romeo, doff thy name,/ And for thy name, which is no part of thee,/ Take all myself”(2.2.47-49)と云うのを聞いたときに Romeo は “I take thee at thy word./ Call me but love, and I’ll be new baptis’d:/ Henceforth I never will be Romeo”(2.2.49-51)と答えた。見つければ殺される危険を冒してまで扉を乗り越えて Juliet に近づこうとしたことから判断すれば Romeo の言葉は本心から出たものである。しかし Romeo がそう言えたのは Romeo という名前に付随するもの—Montague の跡取り息子としての名誉—の重みを知らなかったからである。Mercutio が殺されたときに Romeo はもう一度 Juliet が象徴する非暴力的な家庭的な女性的な生き方、換言するならば Montague 家の一員としての Romeo という名前を捨てた生き方をするか Mercutio が象徴する名誉を重んじる暴力的な男性的な生き方、換言するならば名前にこだわった生き方をするかの選択を迫られて後者を選びなおす(Kahn 87, Leggatt 329 他)。Juliet と交わした約束や夫婦としての契りを反故にして Juliet を捨てて Mercutio を選んだから Romeo は Juliet が住む “heaven”から追放されるのである。

3. Juliet の選択の回避

3.1 Paris との見合いの場としての宴会

一見したところ Juliet の行動は悲劇的結末と密接な結びつきを持たず Juliet は Romeo よりもよりいっそう宿命の犠牲者のように見える。上述したように Romeo と Juliet の恋を悲劇に向かわせる引き金を引いたのは Romeo による Tybalt 殺しであるが、Romeo と Juliet の恋を悲劇的結末に向かわせるもう一つの大きな推進力は Juliet と Paris の縁談である。Tybalt 殺しのかどで Romeo が追放に処せられたことを知った Juliet は激烈に嘆く。娘が Romeo と結婚していることを知らない Capulet は悲嘆の原因を Tybalt の死に帰す。Capulet はかねてから娘と Paris との縁談を進めてきたが娘の気分を悲嘆から晴れやかさに向かわせるために縁談を急速に進めて結婚の日取りさえ決めてしまう。母から Paris との結婚を聞かされた Juliet は抵抗するが父の剣幕に勝てない。

Paris は Juliet が恋心を抱いたことのない人物であるどころか一度も直には求婚されていない人物である。それなのに Capulet は娘の承諾を得る前に Paris との結婚の日取りと

場所を決めてしまい、Juliet には口出しをする余地がない。以上の点からすれば Paris との結婚は Romeo と Juliet の恋を悲劇的結末に向かわせる外因であり Juliet 自身には責任がないように思われる。しかし Paris との縁談の進行に Juliet は本当に関与していないのだろうか。娘に Paris との結婚を切り出す時に Lady Capulet は次のように言う：

Well, well, thou hast a careful father, child;
One who to put thee from thy heaviness
Hath sorted out a sudden day of joy,
That thou expects not, nor I look'd not for. (3.5.107-110)

結婚の日取りが急で Juliet が承諾もしていないのに決定された縁談が不自然であることは言うまでもない。しかしこの縁談は本当に “thou expects not, nor I look'd not for” なのだろうか。Evans らが指摘するように Brooke では Paris が初めて言及されるのは Tybalt の死後であるが、Shakespeare では早くも 1 幕 2 場で観客の眼前で Capulet と Paris の間で縁談が交わされる (Evans 9)。Capulet はこの時には Juliet の若さ故にそれほど積極的ではないが、娘が承諾すれば賛成する旨を告げ、その晩 Capulet 家で開催する宴会に Paris を招待する。一方 Juliet に対しては Lady Capulet を通して Paris から求婚の申し出があったことと今晚 Paris も宴会に出席するから彼のことをよく観察するようにとの旨を告げる。Lady Capulet に “Can you like of Paris' love?” (1.3.96) と聞かれたときに Juliet は “I'll look to like, if looking liking move” (1.3.97) と答える。開放条件を伴う Juliet の答えは彼女が Paris の求婚を承諾したわけではないことを示す。しかしその一方で Juliet が Paris の求婚を承知していることと縁談を進めることに異存はないことをも示唆する。そして 1 幕 3 場は Paris が待っていることを告げる Lady Capulet の台詞と Juliet が Paris と結ばれることを望む Nurse の台詞で終わる：

Lady Capulet: Juliet, the County stays.
Nurse: Go, girl, seek happy nights to happy days. (1.3.104-105)

これは Capulet 家で開かれる宴会が Juliet にとっては実質上 Paris との集団見合いの場であることを示唆する。その見合いの場で Juliet は両親が期待している青年ではなく別の青年との恋に落ちてしまうのである。相手の素性を知る前から Juliet はその人と結婚できないなら死んだ方がマシだとまで思い詰める：“If he be married,/ My grave is like to be my wedding bed” (1.5.133-34)。恋した相手が宿敵 Montague 家の一人息子だと知ると彼女の恋が尋常でない生まれ方をした以上その成り行きが平たんではありえないことを強く意識する：“Prodigious birth of love it is to me/ That I must love a loathed

enemy”(1.5.139-40). それと同時に “must”の使用は “son of [her] great enemy”(1.5.136)であることを知っても彼女の恋心を抑えることはできないことをも示唆する。

宿敵の息子に恋してしまった Juliet が Romeo への愛を貫くなら大きな重荷を背負わなくてはならない。親が娘のために思い定めた人物を用意しているときには負荷がかかる。親が薦める縁談が世間的な目から見た良縁であればあるほどその負荷は増す。大公の親戚である Paris との結婚を薦める両親に宿敵の跡取りと結婚したいと申し出るのは多大の勇気を必要とする。Juliet が Romeo への愛を軽々しく口にすることができないのも道理である。しかし Juliet は Paris の求婚を受け入れられるかという両親の間に縁談を進めることに異存はないことを示唆する答えをして見合い（宴会）に出席しているのである。Romeo への愛が抑えられないほど強いものであることを自覚するなら何故すぐに Paris との縁談の打ち切りを申し出ないのか。Juliet は若さ故に一途ではあるが子供ではない。劇の早い段階で彼女が他者に心の内を悟られないように言葉を選ぶ才覚を備えていることが示される。たとえば Nurse から一目ぼれした相手の名前を聞き出そうとするときには本命の男性の他に別の男性2名も加える。そして本命が宿敵の跡取り息子であることを知った時に思わず口を突いて出た言葉を Nurse に聞きとがめられた時に Juliet は次のように言って取り繕う: “A rhyme, I learn’d even now/ Of one I danc’d withal”(1.5.142-43). 言葉を選び取り繕うすべを身に着けているなら Romeo への恋は伏せておいて別の理由をつけて Paris との縁談の打ち切りを申し出ればよいではないか。Paris との縁談は良縁で両親とも乗り気だとは言え、まだこの段階では Capulet は娘が若すぎていると思っている: “Let two more summers wither in their pride/ Ere we may think her ripe to be a bride”(1.2.10-11). Lady Capulet も Juliet の意向を尊重し、押し付けてはいないのである。それなのになぜ Juliet はそうしないのだろうか。

3.2 結婚話を持ち出す Juliet

答えとして考えられることの1つは Juliet が Romeo との恋に夢中になるあまり Paris の求婚を失念していた可能性である。事実、宴会がお開きになったのちも Romeo への熱を冷ますことのできない Juliet は誰にも聞かれていないと思って窓辺で Romeo への愛を口にする。同様に Romeo も Juliet への熱に浮かされて塀を乗り越えて Capulet の庭に飛び込み Juliet の独り言を立ち聞きする。Juliet の思いを知ると Romeo が名乗り出て二人は愛を誓うが、彼らの愛の言葉は何度も Nurse が Juliet を呼ぶ声に中断される: “Anon, good Nurse”(2.2.137); “I come, anon”(2.2.150); “By and by I come”(2.2.151). Nurse の声は Romeo と Juliet の恋が日常の現実と切り離して存在することはできないことを示唆する。Juliet が置かれている現実の一つはもちろん Romeo が Montague 家の一人息子であるから彼との恋の道が平たんではありえないことである。Juliet はこの現実については片時も忘れたことはない。しかしもう一つの現実、すなはち Paris の求婚についてはどうだ

ろうか。Juliet は Lady Capulet だけでなく Nurse から Paris との縁談の成立を期待する言葉をかけられて宴会に出席したのである。Nurse の言葉は Juliet に Paris の求婚を思い出させないのだろうか。

通常 Juliet は Romeo よりもはるかに現実的で行動力があると考えられている。Romeo に結婚を提案するのも彼女だし、仮死状態を引き起こす劇薬を飲むのも彼女だし、Romeo の服毒自殺よりもはるかに壮絶な短剣自殺をするからである。しかし彼らの行動の違いは彼らの気質の違いだけに由来するのだろうか。Juliet が Romeo に結婚を提案する経緯をたどってみよう。

独り言が Romeo に聞かれてしまったことを知ると Juliet は Romeo に彼女の恋を率直に告げ、二人は愛の言葉を交わす。しかし Juliet は Romeo の愛の誓いを受けようとしない。恋は時間をかけて成熟させるのが良く、出会ってすぐに誓いを交わすのはあまりにも性急で思慮分別に欠くと思うからである。だから次回の出会いを楽しみにして今日はこれまでにしようと言って別れの挨拶をする：

Well, do not swear. Although I joy in thee,
I have no joy of this contract tonight:
It is too rash, too unadvis'd, too sudden,
.....
This bud of love, by summer's ripening breath,
May prove a beauteous flower when next we meet.
Good night, good night. (2.2.116-123)

愛の言葉を交わしあったのに誓いの言葉を受けてもらえないので Romeo は満足を得ることができず別れの挨拶をされても窓辺からなかなか去ろうとしない。Juliet 自身も Romeo から離れがたく “Good night, good night” と言った後も Romeo と言葉を交わし続ける。Juliet が、Nurse が呼ぶ声を聞くのは別れの挨拶をした後でなおも言葉を交わし続けているときである。Nurse の呼び声を聞いたときに Juliet は “I hear some noise within. Dear love, adieu.”(2.2.136)ともう一度別れの挨拶をする。Romeo に引き下がられて言葉を交わし続けているが Juliet はすでに別れの挨拶をすませているのである。Nurse に呼ばれたらそれを機に Romeo との逢瀬を終わりにするのが自然である。しかし Juliet は “Dear love, adieu” と言った後で今度は彼女の方から Romeo を呼び止めるのである: “Stay but a little, I will come again”(2.2.138). そして言葉通りにすぐ戻ってきた Juliet は Romeo に結婚を切り出すのである。Juliet は Romeo にもしあなたが心から私のことを思ってくれていて結婚を考えてくれるなら明日人をやるからいつどこで式を挙げるか知らせて頂戴と言うのである。彼女が結婚話を切り出している間にも奥で二度までも Nurse が Juliet を

呼ぶ声がする。Nurse に呼ばれた Juliet は少しの間窓辺から姿を消すが三度姿を現し Romeo と明日人をやる時間の打ち合わせをした後今度は完全に窓辺から姿を消すのである。

3.3 縁談の打ち切りを先送りする Juliet

この場面の半ばで恋は時間をかけて育むもので出会ったその日に誓いの言葉を交わすのはあまりにも性急で分別に欠けると主張していた Juliet が何故 30 行も隔てないうちに結婚話を切り出すのだろうか。Juliet が結婚を持ち出すのが Nurse に呼ばれた後であることしかも Nurse の呼ぶ声を聞いて別れの挨拶を繰り返した後で 1 行開けただけで気が変わってすぐ戻ってくるから待っててと言いき、戻ってきてすぐに結婚話を持ち出すことは Nurse に呼ばれることが Juliet の気持ちの変化を促したことを示唆する。先に Nurse の声は Juliet をロマンチックな愛の語りから日常的な現実的な世界に連れ戻す働きがあると述べた。Nurse が思い出させる日常生活の現実が Paris の求婚である。Rosaline は Romeo の片思いの恋人で Romeo のことを齒牙にもかけていなかったのだから Romeo の気が変わればそれまでである。しかし Paris はまだ直接 Juliet の意向を確かめるに至ってはいないものの、父を通して正式に求婚をしてきており、事実上の見合いの場まで用意された人物である。Juliet に結婚の意思がなければ縁談の進行を止めなければならないのである。だが Juliet にとって Romeo と同様に両親の愛も大事である。Romeo が Montague でなければ即刻一目惚れした人ができたという明確な理由で Paris の求婚を辞退したであろう。しかし別の理由をつけて断るにしても両親の落胆と引き換えにするには代償が大きすぎる。しかも Romeo との関係は宙ぶらりんに過ぎないのである。なるほど Romeo は Juliet の気持ちを知ると愛の言葉を返してくれた。Juliet は Romeo の言葉を信じたいと思う。しかし Juliet は恋人の誓いの言葉の虚しさを知っている: “At lovers’ perjuries,/ They say, Jove laughs”(2.2.92-93)。だから Romeo の恋が本気かどうかを試したいと思う。恋は時間をかけて育てるべきものとは思いますが、Paris から求婚されている Juliet には時間がない。だから結婚を持ち出したのではないか。

それなのに Romeo が結婚の日取りと場所を Nurse に告げ明確な結婚の意思を示した後も Juliet は Paris の求婚の辞退を申し出ない。Romeo の返事をなかなか伝えず Juliet を焦らす時に Nurse と Juliet の間で交わされる会話の中で “Where is your mother?” が繰り返される。

Nurse: Your love says like an honest gentleman,
And a courteous, and a kind, and a handsome,
And I warrant a virtuous—*Where is your mother?*

Juliet: *Where is my mother?* Why, she is within.

Where should she be? How oddly thou repliest.

“Your love says, like an honest gentleman,

‘Where is your mother?’ (2.5.56-62, my emphasis)

“Where is your mother?”はもちろん Romeo の返事を待ち焦がれている Juliet を焦らすために Nurse が関係のない話を持ち出すのに使う言葉である。Juliet は話の腰を折りなかなか結果を教えてくれない Nurse にいらだち Nurse の言葉を繰り返す。しかし7行の中で3度も繰り返されるので “Where is your mother?”は観客に印象づけられる。Paris の求婚を Juliet に伝えたのは母である。そして Juliet は母に縁談の進行に前向きと解釈されうる返事をしているのである。Romeo の結婚の意思を聞き出そうとする文脈で母の存在に言及する言葉が繰り返されることは、もう一つの結婚に関する意思の有無、すなはち Juliet に Paris の求婚を思い出させないのだろうか。Nurse の言葉を繰り返した後で Juliet はもう一度 “Come, what says Romeo?”(2.5.66)と聞く。Nurse は Juliet の質問に質問で答える：“Have you got leave to go to shrift today?”(2.5.67) Juliet に “leave”を与えるのはもちろん彼女の両親である。両親の存在を思い出させることによって Nurse の間は観客に今一度 Juliet が両親から告げられた Paris の求婚を保留にしたままで Romeo との結婚に突き進むことの危険性を想起させる。

3.4 選択を突きつけられる Juliet

Juliet は Paris の求婚に対する返事を棚上げにすることによって Romeo の愛と両親の愛情 (=庇護) の両方を維持してきた。しかし Juliet の問題の先送りは長続きしない。それどころか最悪のタイミングで二者の選択を突きつけられる。Tybalt 殺しで Romeo に追放の宣告が下された悲しみに打ちひしがれているときに Paris との結婚を強要されるからである。しかしこの期に及んでなお Juliet は問題の先送りを試みるのである。Lady Capulet から Paris との縁談がまともな今週の木曜日の早朝に Saint Peter’s Church で式を挙げることに決まったことを告げられた時に Juliet は次のように言う。

Now by Saint Peter’s Church, and Peter too,

He shall not make me there a joyful bride.

.....

I will not marry yet. And when I do, I swear

It will be Romeo, whom you know I hate,

Rather than Paris. (3.5.116-123)

この台詞は一見 Paris との結婚に対する Juliet の明確な反対の意思表示のように思える。

しかし細部は Juliet が明確な反対意思表明を避けようとしていることを明らかにする。たとえば 117 行目の “there” は聞き手に “Saint Peter’s Church” でなければ良いのかと思わせる。また 121 行目の “I will not marry yet” は 13 歳という若さを考えるなら Juliet はまだ結婚を受け入れられる年齢に達していないだけなのかもしれないと思わせる。なるほど 121 行目から 123 行目にかけて Juliet は Paris よりも Romeo を選ぶと言う。しかし Romeo の説明として “whom you know I hate” を付け加え、さらにあくまで未来の話として語ることによって Juliet が Paris との結婚を受け入れられない本当の理由を母親に悟られないように配慮する。その結果 Paris との結婚に明確な拒否反応を示すと言うよりも駄々をこねているだけのような印象を与える。

父に対する答えはより一層不明瞭である: “Not proud you have, but thankful that you have./ Proud can I never be of what I hate,/ But thankful even for hate that is meant love”(3.5.146-48). Paris が “a very flower”(1.3.78)であるのに対して Romeo は今や Capulet 家の宿敵の息子であるにとどまらず Lady Capulet の甥殺しであるのだから Juliet が Romeo との結婚を告白するのに多大の勇気が必要とされることは言うまでもない。なるほど Paris は Juliet に直に求婚して承諾を得たわけではないし、結婚の日取りが急なものも不自然である。それらを認めた上で既に決定が下され数日後に迫っている結婚を阻止するには Juliet の答えはあまりにも要領を得ず力不足である。“Good father, I beseech you on my knees./ Hear me with patience but to speak a word”(3.5.158-59)と言うときに Juliet は Romeo との結婚を告白しようとしたが Capulet の剣幕に押し切られて告白するチャンスを奪われたのかもしれない: “You are to blame, my lord, to rate her so”(3.5.169); “You are too hot”(3.5.175). Juliet の意思に反して Paris との結婚を強要する Capulet が暴君的に見えることは否めない:

And you be mine I’ll give you to my friend;
And you be not, hang! Beg! Starve! Die in the streets!
For by my soul I’ll ne’er acknowledge thee,
Nor what is mine shall never do thee good.
(3.5.191-94)

しかし Capulet の脅しを *Romeo and Juliet* と多くの共通点を持つ *A Midsummer Night’s Dream* の Egeus の台詞と比べると Capulet の脅しは温情的である:

As she is mine, I may dispose of her;
Which shall be either to this gentleman,
Or to her death, according to our law

Immediately provided in that case. (*A Midsummer Night's Dream* 1.1.42-45)

なるほど Capulet の “hang”や “Starve”や “Die in the streets”も Juliet に死を突きつける言葉である。しかしそれは Egeus のような法による積極的な死を求めるものではなく Capulet が庇護を拒否することによって Juliet にもたらされるであろう消極的なものにすぎないからである。自殺は神の意思に背く罪である (Roberts 19) が親に勘当されて生計を立てる術を失った結果もたらされる死なら罪にはならない。換言するならば両親の庇護を求めず、死を賭して生きる覚悟があれば Juliet は Paris との結婚を拒否することができるのである。 *A Midsummer Night's Dream* の中で Hermia は Lysander との愛を貫くために駆け落ちする。同様に *The Two Gentlemen of Verona* の中では Julia は変装して Proteus を探す旅に出るし Sylvia も喜んで Valentine と駆け落ちする (Kingsley-Smith 146)。これらの喜劇の主人公たちと異なり Juliet は両親との絶縁を恐れているように思われる。

3.5 より鮮明になる Juliet の選択の回避

Romeo への愛を取るか両親の庇護を取るかについての Juliet の選択の回避がより鮮明になるのは 4 幕 1 場の Friar Lawrence の庵で交わされる Paris と Juliet の会話である：

Paris: Happily met, my lady and my wife.

Juliet: That may be, sir, when I may be a wife.

Paris: That may be, must be, love, on Thursday next.

Juliet: What must be, shall be. (4.1.18-21)

劇の初めの Capulet 邸の宴会は Juliet と Paris の見合いの場になることが意図されていたが、宴会で Juliet が Paris に求婚された形跡はない。だから両親から Paris との結婚が決まったことを告げられた時に求婚もされていないのに結婚するのは不自然だという Juliet の異議申し立ては正当であり、Friar Lawrence も Paris にその点に関して警告している：“You say you do not know the lady's mind./ Uneven is the course, I like it not”(4.1.4-5)。しかし偶然の出会いを利用した会話にすぎないにしてもここでは Paris は明確に結婚を前提として Juliet に話しかけているのである。なるほど Juliet は結婚を了解しているとは言わない。しかし “That may be sir, when I may be a wife”は Paris の妻になる可能性を否定するものではないし “What must be, shall be”は不承不承ではあるが Paris との結婚を承諾したと解釈されうる。もし Juliet が Paris に面と向かって「あんたなんか嫌いだ、あんたと結婚するくらいなら Romeo と結婚した方がマシだ」と叫んでいたなら Paris との縁談は破談になったであろう。

Paris が退場すると Juliet は Paris と結婚するくらいなら自殺すると言って Friar Lawrence に救済策を迫り、仮死状態を引き起こす薬を飲んで急場を凌ぐという姑息な手段を引き出す。毒薬かも知れない薬を飲んで納骨堂に埋葬されることが多大の勇気を必要とするとは言うまでもない。秘密結婚とは言え Romeo と Juliet は Friar Lawrence 立会いの下で式を挙げたのだから本来なら Paris との重婚を防ぐためには Friar が Juliet と Romeo の結婚を Juliet の両親並びに Paris に証明するべきである。それなのにそれを怠っていかがわしい手段を薦めるのは聖職者としての職責を放棄する行為であるように思われる(Herman 155, Kriegel 171 他)。これらの点を認めたとえ Juliet にも両親の愛情を断ち切ってまで Romeo の愛を選択する覚悟ができていなかったことは否定できない。Friar Lawrence は劇の終わりでも弱さを露呈する。想定外の事態が起こり彼の計画が失敗して Paris が殺され Romeo も自殺し事件の捜査の手が伸びていることを知った時に Friar Lawrence は Juliet を一人残して墓から逃げるのである。しかしそれでも劇の終わりで逃げ切れないことを悟った時には彼が事件の最大の責任者であることを認めて事件の経緯を語り、厳罰を受ける覚悟を示す。もし Friar Lawrence の庵で Paris が Juliet に話しかけた時に Juliet が Friar Lawrence に彼女がすでに Romeo と結婚していることを証明してほしいと迫っていたなら彼は聖職者としての責任を引き受けたであろうからだ。

4. Juliet の成長

4.1 Nurse との決別

上述したように Romeo と Juliet が悲劇的結末を迎えることの責任の一端は Juliet の両親との対立の回避にある。とは言え Juliet は悲劇的運命を歩む過程で徐々に依存から脱却し最後には独立した一個の人間として自らの人生に決着をつける。

劇の初めで Juliet は両親に Paris との結婚が期待されていることを知りながら宿敵の跡取り息子であることを承知の上で Romeo と結婚する。しかし Paris との縁談の進行中止も申し入れなければ Romeo との結婚も打ち明けないことによって両親との対立を避け結婚後も両親の庇護を享受し続ける。それどころか Juliet は両親の意向に反する結婚をするときにも Capulet の娘としての特権を利用する。Juliet は Nurse を Romeo のもとに送って彼の結婚の意思の有無を確認するのである。さらには追放を宣告された Romeo と Juliet の最後の逢瀬のお膳立てをするのも Nurse である。しかしやがて Nurse の力も Juliet の苦境を救う役に立たなくなる時が来る。両親から Paris との結婚の決定を告げられた時に Juliet は初めて両親に抵抗するが彼女の主張は聞き入れられるどころか Capulet の激しい怒りを買うだけである。Nurse の取り成しの試みも全く功を奏さず Juliet は Capulet から Paris と結婚するか勘当かの選択を申し渡される。そこで Juliet は母に取り成しを願う。しかし母も Juliet の味方になってくれない。Juliet は次に Nurse に慰めを求める。

Nurse は Juliet に Romeo は追放の身で死んだも同然であるから Romeo を捨てて Paris と結婚することを薦める。Juliet が苦しんでいるのは彼女が Romeo を心から愛し Romeo を裏切ることが考えられないからである。Juliet にとって Nurse は親にも明かすことのできない心の底の思い、すなはち Romeo との恋を打ち明けるだけでなく、恋の使いとして積極的に利用できる存在でもあった。Juliet が一目惚れした相手の名前を聞き出すことから Romeo と Juliet の最後の逢引のお膳立てに至るまで Nurse は Romeo と Juliet の恋に欠くことのできない存在である。それどころか Juliet の使いで Nurse が Romeo に結婚の意思を聞かなければそもそも Romeo と Juliet の結婚は成立しなかったであろう。Nurse はまさに Juliet の右腕だったのである。しかし Nurse が Romeo を捨てることを提案した以上 Nurse に頼っても Romeo に忠実である道を模索する役には立たないことを知り、Juliet は Nurse と袂を分かち決意をする。Nurse の薦めが本心からのものであることを確かめると—“And from my soul too, else beshrew them both” (3.5.227)—すかさず “Amen”(3.5.228)と言うし Nurse が退場すると “Ancient damnation! O most wicked fiend”(3.5.235)と毒づき “Thou and my bosom henceforth shall be twain”(3.5.240)と言う。とは言えこの時点で Juliet は両親や Nurse に対する依存心を完全に断ち切っているわけではない。もし両親の勘当を恐れないほど依存心を断ち切っているなら Nurse と袂を分かち決心をした時に Paris と結婚するくらいならこんな家出てやるとタンカを切ればよいからである。しかし Juliet は Nurse のアドバイスは大いに慰めになった、父を怒らせて申し訳なかったと思うので告解するために Friar Lawrence の所に行く嘘をついたのである。両親との対立を避けることによってもう一度家に戻ってこられる可能性を残すのである。

4.2 Friar Lawrence の計画を実行する Juliet

Friar Lawrence に Paris との結婚を避ける術を迫る時に Juliet は貞淑な妻として生きていくためなら命じられれば塔の狭間から飛び降りるし、追剥が出る道を歩くし、クマと一緒に鎖で繋がれてもよいし、納骨堂で一夜を過ごしたり死人と一緒に経帷子にくるまって隠れることも厭わないと言う。Juliet の言葉が本心から出たものであることは彼女の台詞の後半を地で行くことを必要とする Friar Lawrence の提案、すなはち仮死状態を引き起こす薬を飲み Capulet 家の墓所に埋葬されそこで Romeo の到着を待ち二人で Mantua に行くことを聞いたときに Friar Lawrence から薬を受け取ることに躊躇しないことによって示唆される。しかし Paris との結婚を避けるために厭わない行為として Juliet が挙げる交換条件の中に両親との対立が入っていないことは看過できない。両親との対立も厭わないのであれば直前の Paris との会話の際に Romeo と結婚していることを告げれば済むからである。Juliet が最後まで隠しているから Paris は Juliet との結婚を信じて Friar Lawrence の庵を出て行くのである：“Juliet, on Thursday early will I rouse ye;/Till then, adieu, and keep this holy kiss”(4.1.42-43). Friar Lawrence の計画は博打であるがそれで

も Juliet がその計画に乗ったのは Friar Lawrence の計画が親との対立を要求しない、むしろ親に従順な娘として振る舞うように指示するものだったからではないか: “Go home, be merry, give consent/ To marry Paris”(4.1.89-90). 3 幕 3 場で追放を宣告された Romeo を励ます時に Friar Lawrence は時宜を見て結婚を公表し大公の許しも得て Romeo を呼び戻す計画を述べた。両親との対立を避ければやがて頃合を見計らって Friar Lawrence が、Juliet が本当は生きていて Romeo と結婚して Mantua にいることを公表して両家の祝福の内に二人を呼び戻してくれる可能性があると思ったと考えるのは強引な推測だろうか。Friar Lawrence の指示に従って改心した従順な娘を演じることが父を喜ばせて結婚式の日にちをさらに一日早まらせ結果として Friar Lawrence の計画の破綻に貢献することは皮肉である。

成否が定かでない Friar の作戦を実行するのは多大の勇気を必要とする。Juliet は Lady Capulet と Nurse を下がらせた後で怖くなり彼女を呼び戻して慰めてもらいたいと思う。他者に知られては実行できないことに気づき呼び戻すことを思いとどまるものの恐ろしい想像が次々に Juliet を襲う。Friar Lawrence から手渡された薬が毒薬である可能性や Romeo が救い出しに来てくれる前に目覚めて健全な空気が入らない納骨堂の中で窒息したり身の毛もよだつ存在に取り囲まれて発狂する想像にさいなまれるのである。Juliet は渾身の力を振り絞って恐怖心を振り捨てる。恋の使いも、最後の逢瀬のお膳立ても Nurse が引き受けてくれた。心の内で Nurse と決別した時もその決意を胸に秘めておくことでいざというときには Nurse に頼れる余地を残しておいた。しかし劇薬を飲むときに Juliet は Friar Lawrence を信じて初めて Nurse の助けを借りずに独力で大仕事をするのである。

4.3 Friar Lawrence から独立する Juliet

納骨堂の中で目を覚ました Juliet は Friar Lawrence の計画が失敗して Romeo が死んでしまったことを知らされる。見張りの者が近づいているから一緒に逃げよう、修道院に入れる手続きをするから今後の生活の保障はすると言われても Juliet はもはや Friar Lawrence の言葉に従わない。彼女は Friar を去らせ一人納骨堂に残る。Friar Lawrence から渡された薬を飲むときも一人であったがその時はまだ Friar への信頼が彼女を支えていた。薬を飲む前にも Romeo が救い出しに来てくれる前に目覚めて死と疫病に汚染された不潔な空気で窒息したり身の毛もよだつ存在に取り囲まれて発狂する恐怖にさいなまれた。しかしその時の恐怖はあくまで想像上の恐怖にとどまり実際には彼女は Capulet 家の自分の部屋の中において Nurse も母も呼べばすぐに来てくれる状態にあった。しかし彼女は今や文字通り納骨堂の不潔な空気の中において頼みの綱の Romeo は遅れて来るどころか死んでしまっているのである。Friar Lawrence しか頼れる人がいない状況下で Juliet は Friar を切る。3 幕 5 場で Nurse と別の道を歩むことを決意した時にはその決意を胸の内に秘めておくことによつていざというときには Nurse に頼れる余地を残しておいた。しか

し納骨堂の中で Juliet ははっきり口に出して Friar Lawrence の誘いを断ることによって自らを後戻りできない状態に追いやっているのである：“Go, get thee hence, for I will not away”(5.3.160).

Friar Lawrence が去った後で納骨堂に一人残った Juliet は Romeo の手に握られている杯から Romeo が毒杯をあおって死んだことを知る。Juliet は Romeo が飲み残した毒で後追いしようとするが毒は一滴たりとも残っていないことに気づき “O churl, Drunk all, and left no friendly drop/ To help me after?”(5.3.163-64)と言う。Juliet がしようとする行為は自殺である。しかし行為の禍々しさに反して彼女が口にする “churl”は恋人に甘え、恋人の意地悪に拗ねて口を尖らせるときに使う言葉である。そして Friar Lawrence から手渡された薬を飲む前にその薬が毒薬である可能性に脅えていたのと対照的に毒薬を “friendly”という形容詞で修飾する。杯の中には残っていても唇についた毒で死ぬるかもしれないと言って Romeo の唇にキスをする。166 行目の “die”は「命を失う」という意味で用いられる。しかし “churl”という語の後で口にされる “kiss”(5.3.164)は自殺の手段として Romeo の唇に残された毒を吸うための行為というよりもむしろ性行為の前戯としての愛撫である。このように性的ニュアンスを大いに帯びた文脈の中で用いられる 166 行目の “die”は生命の終焉としての一義的な意味の他に性的な “ecstasy”の意味も帯びる。

Juliet は劇の中で何度も “die”またはそれと関係のある言葉を口にしてきた。劇の初めで Romeo と恋に落ちたがまだ Romeo の名前すら知らないときに “die”の縁語である “grave”を用いて次のように言う：“If he be married,/ My grave is like to be my wedding bed”(1.5.133-34, my emphasis). Paris との結婚を回避するための策を求めて Friar Lawrence を訪問するときにも Juliet は “die”を口にする：“I’ll to the Friar to know his remedy,/ If all else fail, myself have power to die”(3.5.241-42, my emphasis). Friar に方策を迫る時にも “die”という語を用いる：“I long to die/ If what thou speak’st speak not of remedy”(4.1.66-67, my emphasis). またこれに先立つ台詞の中では “die”という語は用いていないが繰り返し自殺に言及する：“with this knife I’ll help it presently”(4.1.54); “this shall slay them both”(4.1.59); “Twixt my extremes and me this bloody knife/ Shall play the umpire”(4.1.62-63). さらに Friar Lawrence に手渡された薬を飲む前にも自殺をほのめかす：“This shall forbid it”(4.3.23). しかしこれらの死への言及は 5 幕 3 場で納骨堂に一人残った時の死の言及とは決定的に異なる。5 幕 3 場以前は最悪の事態、すなはち Paris との結婚を避けるための最後の手段が自殺であった。しかし 5 幕 3 場では Paris も死んでしまっているのでもはや Paris との結婚を避ける手段にはなりえない：“Thy husband in thy bosom there lies dead,/And Paris too”(5.3.154-55 my emphasis). Juliet の Romeo への愛は純粋で誠実なものである反面、Juliet の心の内には両親の庇護を完全に断つことの恐怖も潜んでいた。それゆえ両親に対する Romeo との結婚の告白を先送りにしてきたし心の内で Nurse と歩みを同じくしないことを決めた時でも決定的に対

立することを避けてきた。

しかし納骨堂の中で Romeo の後追いをしようとするときにはもはや Capulet の庇護下に戻りたい願望も Friar Lawrence に対する依頼心も断ち切っている。依頼心を断ち切った時に Juliet にとっての死は重婚を回避するための最後の手段としての消極的なものから Romeo と結ばれるための、望ましい積極的な手段に転ずる。だから死をもたらす毒薬が“friendly”で“restorative”なのである。心が固まった Juliet は物音が聞こえてももはや逃げない。むしろ Romeo の後追いを邪魔されないために自ら短剣を突き刺し死ぬ: “O happy dagger. This is thy sheath. There rust, and let me die”(5.3.168-69). “dagger”は男根を象徴する(イメージシンボル事典、“dagger”1)。よってここでの“die”は一義的には“To lose life, cease to live, suffer death; to expire”(OED, 1.a)であるが、それと同時に“To experience a sexual orgasm”(OED, 7 d)という意味も隠されている。同様に“happy”も“Coming or happening by chance; fortuitous; chace”(OED, 1)という意味と“Having a feeling of great pleasure or content of mind, arising from satisfaction with one’s circumstances of great pleasure or content of mind, arising from satisfaction with one’s circumstances or condition”(OED, 4 a)両方の意味を帯びている。“dagger”が“happy”なのはたまたま Juliet の手元にあったので自殺の手段として使えるからであると同時に Juliet と Romeo を結び付けてくれるものだからである。

後朝の別れの時に Juliet が予感したように Romeo と Juliet が生きている間に再び出会うことはなかった。Romeo と Juliet の結末が死であることに観客は憐憫を覚える。しかし Juliet の死は単なる敗北ではない。短剣による自殺はそれに先立つ、新妻が夫に甘えて口を尖らす言葉である“churl”や性的前戯である“kiss”の文脈の中で性的ニュアンスを帯びる。Juliet が自分に Romeo の短剣を突き刺すことは性交を象徴する。生きていた時には Romeo と Juliet の間には両家の怨恨が横たわっていた。Romeo との恋に落ちた晩に Juliet は“Deny thy father and refuse thy name./ Or if thou wilt not, be but sworn my love/ And I’ll no longer be a Capulet”(2.2.34-36)と言った。だが実際には彼女の言葉に反して Juliet は結婚後も Capulet であるのをやめること—Capulet の庇護を捨てること—はできなかった。二度と Capulet の庇護下に戻れないことを承知の上で自らに短剣を突き刺す時に Juliet は二人を隔てていた怨恨を超越する(Leggatt 335, McAlindon 63 他)。この世的な尺度からすれば Romeo と Juliet の死は彼らが両家の怨恨の犠牲になったことを意味する。しかし死と引き換えに Juliet が Romeo と結ばれることは Juliet は二人を引き裂いていた両家の怨恨の勝利者として ecstasy の内に死ぬことをも意味する。

5. 結び

Romeo and Juliet についての一般的な解釈は Romeo と Juliet の悲劇的結末が Capulet

と Montague 両家の確執や偶然にもたらされるというものである。主人公の行動と悲劇的結末との関わりについては未熟さからくる性急さや Romeo の Tybalt 殺しについての論考は存在するが Juliet の行動と悲劇的結末の関係性についてはほとんど考慮されてこなかった。結婚を提案するのも仮死状態を引き起こす薬を飲んで納骨堂に埋葬される危険を冒すのも毒杯をあおるよりもはるかに壮絶な短剣自殺を執行するのも Juliet であるから Juliet は行動力旺盛な女性だと考えられてきた。しかし彼女の行動を子細に検討すると旺盛な行動力と裏腹に彼女は両親との対立を回避することがわかる。その回避が Juliet に Paris の求婚辞退の返事を遅らせ、その結果 Juliet が知らぬ間に縁談は急展開して結婚式の日取りと場所まで決められてしまう。Juliet は Paris との結婚を阻止しようとするが Romeo とすでに結婚していることを告白する勇気は持たないので彼女の抵抗は Capulet の家父長としての権威の前で無力である。両親との対立を避けた Juliet は Friar Lawrence を頼るが彼の計画は失敗に終わる。その時初めて Juliet は他者を当てにせず自らの責任において人生を選択する。もはや Juliet は回避や先送りをしようとはしない。夜警の足音を聞いたときに彼女はすぐさま自らに短剣を突き刺しおそらくは Romeo の死体の上に斃れる。死と引き換えに Romeo と結ばれるから Juliet の死は単なる敗北ではなくて Juliet は Romeo との愛を引き裂いていた両家の怨恨に対する勝利者として ecstasy の内に死ぬと言えよう。

注

1. テキストは William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, The Arden Shakespeare (1980; London: Routledge, 1992)を使用した。以下テキストからの引用は本文中に幕、場、行のみを記す。

引用参考文献

- Alfar, Cristina Leon. "Uncovering Female Evil: Blood, Inheritance, and Power." *Fantasies of Female Evil: The Dynamics of Gender and Power in Shakespearean Tragedy*. Newark: U of Delaware P, 2003. 47-76. Rpt. in *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee, Vol 97. Detroit: Gale, 2006. 118-36.
- "dagger." 『イメージ・シンボル事典』1984.
- Dickey, Franklin M. "To Love Extreamly, Procureth Eyther Death or Danger." *Romeo and Juliet: Critical Essays*. Ed. John F. Andrews. New York: Garland, 1993. 269-83. Rpt. of *Not Wisely But Too Well*. 102-17.
- "die." Def. 1a, 7d. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Evans, G. Blakemore. Introduction. *Romeo and Juliet*. 1989. By William Shakespeare. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 1984. 1-48.
- Franson, J. Karl. "Too soon marr'd": Juliet's Age as Symbol in *Romeo and Juliet*." *Papers on Language & Literature*. 32, no.3 (Summer 1996): 244-62. Rpt. in

- Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 97. Detroit: Gale, 2006. 66-74.
- “happy.” Def. 1. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Herman, Peter C. “Tragedy and the Crisis of Authority in Shakespeare’s *Romeo and Juliet*.” *Intertexts*. 12.1-2 (2008): 89-109. Rpt. in *Shakespearean Criticism*. Ed. Lawrence J. Trudeau. Vol. 155. Detroit: Gale, 2014. 147-58.
- Kahn, Coppelia. *Man’s Estate: Masculinity and Identity in Shakespeare*. Berkley: U of California P, 1981.
- Kingsley-Smith, Jane. “That One Word ‘Banished’: Linguistic Crisis in *Romeo and Juliet*.” *Shakespeare’s Drama of Exile*. Basingstoke. Macmillan, 2003. 31-53. Rpt. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 97. Detroit: Gale, 2006. 136-52.
- Kriegel, Jill. “A Case against Natural Magic: Shakespeare’s Friar Laurence as *Romeo and Juliet*’s Near-Tragic Hero.” *Logos*. 13.1 (2010): 132-45. Rpt. in *Shakespearean Criticism*. Ed. Lawrence J. Trudeau. Vol. 155. Detroit: Gale, 2014. 169-74.
- Leggatt, Alexander, “*Romeo and Juliet*: What’s in a Name?” *Shakespeare’s Tragedies: Violation and Identity*. 29-54. Cambridge: Cambridge UP, 2005. Rpt. in *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 106. Detroit: Gale, 2008. 323-36.
- McAlindon, T. “*Romeo and Juliet*.” *Shakespeare’s Tragic Cosmos*, 56-75. Cambridge: Cambridge UP, 1991. Rpt. in *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 97. Detroit: Gale, 2006. 56-66.
- Peterson, Douglas L. “*Romeo and Juliet* and the Art of Moral Navigation.” *Romeo and Juliet: Critical Essays*. Ed. John F. Andrews. New York: Garland, 1993. 307-20. Rpt. of *Pacific Coast Studies in Shakespeare*. Eugene: U of Oregon, 1966. 33-46.
- Roberts, Sasha. *William Shakespeare: Romeo and Juliet*. Writers and their Work. Plymouth: Northcote, 1998.
- Shakespeare, William. *A Midsummer Night’s Dream*. Ed. Harold F. Brooks. The Arden Shakespeare. Suffolk: Methuen, 1979.
- -- . *Romeo and Juliet*. 1980. Ed. Brian Gibbons. The Arden Shakespeare. London: Routledge, 1992.
- Snyder, Susan. “*Romeo and Juliet*: Comedy into Tragedy.” *Romeo and Juliet: Critical Essays*. Ed. John F. Andrews. New York: Garland. 73-83. Rpt. of *Essays in Criticism*. 20 (1970): 391-402.
- White, R. S. “Introduction: What is this thing called love?” *Romeo and Juliet*. Ed. R. S. White. New Casebooks. Hampshire: Palgrave, 2001. 1-27.